

2011●図書館展示 9月

新 1号館を歩こう

—サインパネルに使われた図書館所蔵楽譜—



期間●2011年8月29日～9月30日

場所●図書館ブラウジングルーム

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

新 1 号館を歩こう

ーサインパネルに使われた図書館所蔵楽譜ー

いよいよレッスンやアンサンブル等での使用が始まる新 1 号館。
地上 4 階、地下 1 階から成るこの建物内には、当館が所蔵する貴重楽譜をもとに
デザインされたサインパネルがあちこちにあります。
今回の展示では、サインパネルとそのもとになった資料をご紹介します。

目次

1 階	2
2 階	5
3 階	7
4 階	9
地下 1 階	10

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

■ 1 階

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791

Œuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart

モーツァルト、ヴォルフガング アマデウス、1756–1791

モーツァルト全集 第一部 ピアノ編

Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1798-1806

18 世紀の後半は音楽史に関する書物が相次いで出版され、それに伴って作曲家の個人全集の出版が始まるが、この全集はその先鞭をつけた出版物である。モーツァルトの死後に開始された曲集は、タイトルに“Œuvres complètes”を置くが、字句どおりの全集ではなく、選集である。3 部にわかれ、第 1 部がピアノ編でピアノ音楽、歌曲、ピアノを伴った室内楽曲の全 17 巻からなる。

縁飾りで飾られた緑色のカバー、当時の一流の画家による口絵、楽曲のインチピット付き内容一覧というデザインは全巻に共通している。第 1 巻は「モーツァルトの墓の前で悲しむ遺児を抱いたコンスタンツェ」であるが、それ以外は、ほとんどギリシャ神話にもとづくネオ・クラシックな図柄である。印刷はブライトコプフ社が発明した可動活字印刷であったが、この印刷方法は当時最も一般的に行なわれた彫版印刷に比べると経費がかかり、もはや時代遅れであった。ブライトコプフ社はこの全集の後、可動活字印刷を捨て、彫版やリトグラフによる印刷方法に転換している。

Beethoven, Ludwig van, 1770-1827

Grande sonate pour pianoforte et violoncelle, op.69

ベートーヴェン、ルートヴィヒ ヴァン、1770–1827

チェロ・ソナタ 第 3 番 イ長調 op.69

Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1809 初版

楽譜は横長のピアノ譜と縦長のチェロ譜で、ピアノ譜はチェロパートが印刷されていないパート譜の形である。表紙の作品番号は間違っ「59」と印刷された。紙は碓と IAS（キリスト教の象徴）の透かし入り。この楽譜に使われた版は 1809 年の終わりに作品番号の訂正がおこなわれた後、1847 年までに 17 回に分けて 1,000 部が印刷された。

Bellini, Vincenzo, 1801-1835

Norma. Duet for Norma & Adalgisa

ベッリーニ、ヴィンチェンツォ、1801-1835

《ノルマ》より「ノルマとアダルジーザの二重唱」：自筆譜 1831

第5番「シェーナと3重唱」の前半部ノルマとアダルジーザの2重唱の一部で、第2稿にあたる。初稿では一旦書き上げたヴァイオリン2部のアルペッジョを抹消し、和声的な伴奏に書き換え、アルペッジョはクラリネット・パートが担当する。しかし、全体のオーケストレーションを終えた後、ベッリーニは再度改訂を行なった。この第2稿ではクラリネット・パートを削除し、それをヴァイオリン・パートのアルペッジョに戻している。

Rossini, Gioacchino, 1792-1868

Orage et beau temps

ロッシニ、ジョアッキーノ、1792-1868

雷鳴と晴天

自筆譜 ca. 1830

ピアノ伴奏による2重唱曲。1830年頃パリで作曲され、最後のオペラ《ギヨーム・テル》のアルノール役を歌ったテノール歌手アドルフ・ヌリとヴァルテル役を歌ったバス歌手ニコラ＝プロスペル・ルヴァスールに献呈された。作品は、1830年頃パリのトルプナ社から一度刊行されたが、編集者による恣意的改変があり、自筆譜とはいくつかの点で異なっている。

Massenet, Jules, 1842-1912

Grisélidis

マスネ、ジュール、1842-1912

グリセリディス

Paris, Heugel, 1901 初版

ボッカチオの『デカメロン』中の話を元にして作られたオペラ。スカルラッティやヴィヴァルディ、ビゼーも音楽を付けた。楽譜にはマスネの自筆サインがある。「マリー・シュルンベルガー・ゴディオ夫人に。尊敬と深い共感をもって。J. マスネ。パリ、土曜日 11月16日（グリセリディスの練習）」という言葉の後に、1幕目にあるグリセリディスの最初のアリアからひと節が添えられている。この言葉は初演の練習に立ち会った際に記されたものであろう。初演は1901年11月20日であった。

Mahler, Gustav, 1860-1911

X. Symphonie

マーラー、グスタフ、1860–1911

交響曲 第10番

自筆譜1910(Vienna, Österreichische Nationalbibliothek, Musiksammlung
所蔵)の複製版

München, Verlag Walter Ricke, 1967

未完に終わった最後の交響曲。第4楽章に書き込まれたマーラーの言葉。

—表紙

悪魔が私とおどっている

狂気よ、私をとらえよ、呪われた者よ！

私を滅ぼせ

生きていることを私が忘れるように！

生きることを私がやめるように

私が……忘れるように

—最終ページ

それがどんなことなのか、知っているのはあなただけ

ああ！ああ！ああ！

さようなら私の豎琴！

さようなら ああさようなら さようなら

さようなら ああ ああ

Beethoven, Ludwig van, 1770-1827

Sinfonie mit Schluss-Chor über Schillers Ode : An die Freude, op. 125 für grosses
Orchester, 4 Solo- und 4 Chor-Stimmen

ベートーヴェン、ルートヴィヒ ヴァン、1770–1827

交響曲 第9番 ニ短調 op.125

Mainz, Schott's Söhnen, 1826 初版

作品123の《ミサ・ソレムニス》、作品124の《序曲 献堂式》とセットで行なわれた予約出版である。スコア、パート譜、ヴォーカル・スコアが同時に出版された。ベートーヴェン時代の出版譜はフランス語で記される事が多かったが、後期に入るとドイツ語が主流になる。表紙は被献呈者であるプロイセン国王の紋章と名前が大きく彫られ、作曲者の名前はその下に置かれている。同じ1826年中に出版された後刷にはメトロノーム記号が付された。

Bach, Johann Sebastian, 1685-1750

Vergnügte Pleißenstadt

バッハ、ヨハン セバスチャン、1685-1750

満ち足りたプライセの町

筆写譜 1728

バッハのカンタータ《満ち足りたプライセの町よ》BWV216 のオリジナル・パート譜。曲は1728年2月5日にライプツィヒのシェルハーファー・ハウスで初演された、市民のための結婚カンタータ。自筆譜は失われ、C.G. マイスナー筆写によるソプラノ、アルトのパート譜のみが伝承されている。1920年代から消息不明になっていたが、ピアニスト原智恵子の遺産より発見され、本図書館に収められた。世界的にも貴重な資料である。

■ 2階

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791

Sehnsucht nach dem Frühling

モーツァルト、ヴォルフガング アマデウス、1756-1791

春への憧れ

Wien, Alberti, 1791 初版

《春への憧れ》は『子供と子供好きな人のためのクラヴィーア伴奏歌曲集』(Liedersammlung für Kinder und Kinderfreunde am Clavier) の「春の部」(全30曲)の第1曲である。モーツァルトの作品としては他に《春の初め》と《子供の遊び》が掲載されている。他に「冬の部」が出版されたが、「夏の部」と「秋の部」は出版の形跡がない。

口絵はクラヴィーアを弾く母親を中心に子供たちがさまざまな楽器を奏でている図で、曲集が家庭音楽用であることを伝えている。楽譜の歌の部分はソプラノ記号である。

Schubert, Franz, 1797-1828

An die Freude von Schiller

シューベルト、フランツ、1797-1828

歓喜に寄す

Wien, J. Czerny, 1829 初版

ベートーヴェンの第9交響曲の終楽章にも使われたシラーの頌詩《歓喜に寄す》につけた曲。1815年に完成していたが、出版はその14年後の1829年に、他の2つの曲、“Lebens Melodien”《生の調べ》、“Die vier Weltalter”《4つの時代》とともに作品111として、死後に行なわれた。前半が独唱、リフレイン部は合唱と指定されている歌は集会や酒場でも簡単に歌えるように単純な作りであるが、リフレインは拍子も曲想も異なる。

Schönberg, Arnold, 1874-1951

Von Heute auf Morgen

シェーンベルク、アルノルト、1874-1951

今日から明日へ

Berlin, Selbstverlag des Komponisten, 1930 初版

1928年から29年にかけて作曲された全1幕の結婚喜劇で、台本はマックス・ブロンダとなっているが、シェーンベルク夫人のガルトルートによる。出版は、当時出版元と折り合いが悪くなっていたため作曲家による自費出版である。縦44センチ横32.5センチの大型スコアは石版の技法で印刷されているが、石版用転写紙にシェーンベルク自身の手で書かれた部分と、道具を使って楽譜を作成した部分とが入り混じっている。

Spontini, Gaspare, 1774-1851

Tantum ergo

スポンティーニ、ガスパーレ、1774-1851

タントウム・エルゴ

自筆譜 1797

タントウム・エルゴとは、カトリック教会の聖体降福式で歌われる聖歌で、「ゆえに我ら大いなる聖典をあがめ」を意味する。ソプラノとオルガンで奏されるこの曲は、ナポリのピエタ・デイ・トゥルキーニ音楽院に入学した年に書かれた。楽譜は2段譜のオルガン・パートの中央にソプラノ・パートが置かれている。直しは一箇所を除いてほとんどないことから、音楽院の課題として作曲されたのかもしれない。

Giordano

Caro mio ben

ジョルダノ

カロ・ミオ・ベン

London, Preston, 1785?

楽譜は弦4部の伴奏を伴ったスコアで、歌詞は英語とイタリア語。非常に有名な曲であるが、作曲者がジュゼッペ (1751-1798) なのか、その父親のトマソ (1733年頃-1806) なのかは不明である。ヘンデルの作として筆写譜が流通したこともあった。また曲がオペラの中のアリアなのか、カヴァティーナなのか、カンタータなのかも不明である。しかし、伴奏の編成が弦4部であることと、歌詞がイタリア語であることは、各国図書館所蔵の筆写譜に共通している。

Scarlatti, Alessandro, 1660-1725

Songs in the new opera, call'd Pyrrhus and Demetrius

スカルラッチェ、アレッサンドロ、1660-1725

ピュロスとデメトリウス

London, Walsh, Randall, Hare, ca. 1730

1694年に作曲され、彼の存命中にロンドンで初演された唯一のオペラ。オペラの中から主な場面を抜粋して、通奏低音と歌だけの楽譜に仕立て、テキストを英語に直した楽譜である。スカルラッチェが作曲した以外の曲（ニコリーノ・ハイム作曲）が多く混じり、曲と曲の間にはフルートによるエールが挿入されている。標題紙の前には豪華な口絵が置かれているが、題名だけ直して他の出版にも使われた。紙はホルンの透かし入り。

■ 3 階

Lully, Jean Baptiste, 1632-1687

Belléophon

リュリ、ジャン バティスト、1632-1687

ベレロフォン

Paris, C. Ballard, 1679 初版

コリントの王子ベレロフォンの物語で、リュリのオペラの出版楽譜として最初のもの。ルイ王朝下で楽譜出版を独占していたクリストフ・バラールによる出版で、表紙中央に位置するのは出版者商標である。王への献辞のページや序曲、幕の開始時に楽譜上部に付けられた飾帯は他の出版物にも使い回された。楽譜は16世紀にバラール社のために鑄造された菱形音符による活版印刷、紙は葡萄の透かし入りである。このスコアは、演奏に使用されたと思われる歌手の頭文字やカット、あるいは反復箇所の手書き指示が書き込まれている。

Rosenmüller, Johann, ca. 1619-1684

Sonate à 2. 3. 4. è 5. stromenti da arco & altri

ローゼンミュラー、ヨハン、1619頃-1684

二声から五声のためのソナタ集

Nürnberg, Endter, 1682 初版

ローゼンミュラーは17世紀にドイツとイタリアで活躍した音楽家。このヴァイオリン(2)、ヴィオレッタ(2)、ヴィオラあるいはファゴットと通奏低音による12のソナタ集は彼の器楽曲中の傑作である。タイトルページや献呈ページ、自社宣伝ページはイタリア語で、前書きはドイツ語による。表紙中央に置かれた髑髏の意匠は出版者商標である。献呈と自社宣伝ページの飾帯、曲と曲の境の簡素な飾帯は木版で、楽譜部分は活版印刷による。

Charpentier, Marc-Antoine, 1643-1704

Medée

シャルパンティエ、マルカントワース、1643-1704

メデ

Paris, C. Ballard, 1694 初版

《メデ》は子殺しのテーマで有名な王女メディアの物語である。シャルパンティエはローマでカリッシミに師事し、イタリア音楽の影響を受けた。当時のフランスにおけるフランス・イタリア音楽論争では、イタリア音楽派の旗印ともなった。しかし、《メデ》はプロローグと5幕からなるリュリの音楽悲劇の型に従っている。表紙の意匠は出版者商標で、紙は葡萄の透かし入り、献呈ページ、各幕の始まりと終わりには装飾が施されている。

Ponchielli, Amilcare, 1834-1886

Il sindaco babbeo

ボンキエッリ、アミルカレ、1834-1886

間抜けな町長

自筆譜 1851

ボンキエッリがミラノ音楽院在学中の17歳の時に、他の3人の学友と共同して作曲したオペラ《間抜けな町長》のうち、彼が担当したイントロドゥツィオーネ部分の草稿（ピアノによるスケッチ）とオーケストレーションが施されたスコア。様々な消去跡、訂正、そして彼の音楽構造に特徴的な印が認められる。オペラ全体の評判は「目立たない成功を収めた」であったが、ボンキエッリによる音楽部分については、「オーケストラの伴奏のエレガンス、ブッフオ・アリアにおける際立った真実味」と、評価された。

Chopin, Frédéric, 1810-1849

Ballade pour le piano

ショパン、フレデリック、1810-1849

バラード 第1番 ト短調 op. 23

Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1866-69 初版改訂版

初版はパリとロンドン、それにライプツィヒから1836年に同時に出版された。この楽譜はライプツィヒ版初版の再版であるが、表紙のデザインが変り、印刷方法もリトグラフに変り、34小節目の右手の第4音が訂正された。“BALLADE”の周りの渦巻き模様、“Pour le Piano”や作曲者名の装飾など、新しい表紙は装飾的である。

Brahms, Johannes, 1833-1897

Variationen und Fuge über ein Thema von Händel für das Pianoforte

ブラームス、ヨハネス、1833-1897

ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ

Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1871 年以降 初版後刷

ヘンデルの《ハーブシコード組曲》第2巻の第1曲第2楽章の主題に基づく変奏曲とフーガ。楽譜部分が彫版、表紙はリトグラフである。この楽譜は1862年の初版譜を1871年以降に新たに刷りなおして再版したもので、初刷との違いは、価格表示にドイツ帝国統一によって採用された価格単位のマルクが付け加わっている事である。

■ 4 階

Mendelssohn-Bartholdy, Felix, 1809-1847

Ouverture aux Hebrides

メンデルスゾーン・バルトルディ、フェリックス、1809-1847

フィンガルの洞窟

Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1833 ピアノ4手用編曲初版

演奏会用序曲《フィンガルの洞窟》を作曲者自らピアノ4手連弾用に編曲した楽譜。日本語での通称は《フィンガルの洞窟》であるが、ヘブリディーズ諸島の印象と、そこから喚起されたメンデルスゾーンの気分をもとに、フィンガルの洞窟を訪ねる前に作曲の構想が練られた。この序曲の主題を作曲者は手紙の上部にしたためて、ヘブリディーズ諸島の印象とともに家族に送っている。

Brahms, Johannes, 1833-1897

Vier Lieder für eine Singstimme mit Begleitung des Pianoforte, op. 96

ブラームス、ヨハネス、1833-1897

四つの歌 op. 96

Berlin, Simrock, 1886 初版

《死はすがすがしい夜》、《ぼくらはそぞろ歩いた》、《花は仰ぎ見る》、《船路》の4曲。ブラームスの熱烈な讃美者であり、すばらしいピアニストでもあった彫刻家マックス・クリンガーの手になる表紙である。『海』と名付けられ、色は灰色がかった茶色、クリンガーのサイン「M. K. 86」が右下に見える。クリンガーの別の版画『風景』もくるみ表紙として使われた。世紀末的な幻想世界を顕したこの表紙について、作曲者は画家を仲介した出版者ジムロクとクリンガーに不満を表明している。

Schumann, Robert, 1810-1856
Davidsbündlertänze für das Pianoforte
シューマン、ローベルト、1810-1856
ダーヴィト同盟舞曲集
Leipzig, Friese, 1837 初版

表紙は壮麗なゴシック建築の主扉口に「古い格言：いつの世も歎びと苦悩は道連れ。歎びにおいては敬虔であれ、苦悩にあつては勇気を持って備えよ」が刻まれ、「フロロスタンとオイゼビウス」によって「ヴァルター・フォン・ゲーテ（ゲーテの孫）に捧ぐ」と記されている。「フロロスタンとオイゼビウス」は作曲者シューマンのことである。2巻に分けて出版。楽譜は彫版印刷であるが、表紙はリトグラフの手法で細かい装飾が施され、図版は赤の混じった茶色である。楽譜のデザインにはシューマン自ら関与したという。

Schubert, Franz, 1797-1828
Fantaisie, Andante, Menuetto und Allegretto für Pianoforte allein
シューベルト、フランツ、1797-1828
ピアノ・ソナタ 第18番 ト長調 D.894
Wien, T. Haslinger, 1827 初版

「ピアノ音楽博物館」叢書の9巻として出版された時のタイトルは“Fantaisie, Andante, Menuetto und Allegretto”で、4つの小品の集まりとしての性格を持たせていた。自筆譜には「第4ソナタ」と明記してあるため、出版者は第1楽章である「幻想曲」の曲名として“Fantasie oder Sonate”（幻想曲、あるいはソナタ）と表記して、ソナタであることを匂わせている。

■地下1階

Parchment manuscript, fragment
羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 11世紀

11世紀の聖歌本で、主としてマリアの受胎およびキリストの生誕に対するレスポンソリウム（聖歌の一種）が、南ドイツ式書体の譜線なしネウマで記されている。右欄外には、ルネサンス時代の筆跡で「プライテンブロンに十分の一税として」とある。ルネサンス時代には、この種の羊皮紙が軽視され、乱雑に扱われたので、この一葉もおそらく税を包むための袋として利用されたのであろう。なお、プライテンブロンとは、レーゲンスブルク近郊の地名。羊皮紙の大きさは縦33センチ横22センチである。

Bach, Carl Philipp Emanuel, 1741-1788

Claviersonaten mit einer Violine und einem Violoncell zur Begleitung

バッハ、カール フィリップ エマヌエル、1714-1788

伴奏付きクラヴィーア・ソナタ集

Leipzig, Autor, 1776 初版

伴奏付きクラヴィーア・ソナタは、クラヴィーア・ソナタとして作曲した曲にヴァイオリン又はフルートとチェロを付加した、当時好まれた家庭用の音楽。この楽譜は出版から販売までの全てをバッハが責任を持った自費出版譜で予約出版である。クラヴィーア・パートはハ音記号とト音記号の両方が用意された。紙は百合紋の透かし入り。実際の印刷業務を担当した B. C. ブライトコプフの名前は最終ページに記されている。

Händel, Georg Frideric, 1685-1759

Messiah an oratorio in score

ヘンデル、ジョージ フレデリック、1685-1759

メサイア

London, Randall & Abell, 1773-1785 初版改訂版

《メサイア》のスコアは 1767 年に出版されたが、楽譜上の細かい直しが翌年まで 4 回行なわれた。その後同じプレートをを用い、表紙の語句やデザイン、出版者の変更等を経て 1807 年まで十数回にわたって出版が続けられた。この楽譜は初版出版者による最後の版だが、正確な出版年は不明である。ヘンデルの肖像画の口絵と予約者リスト付き。この時代に大規模作品のスコアの出版は稀であったが、《メサイア》出版は出版王国であったイギリス人のヘンデルに対する敬愛の念を表している。

Parchment manuscript, fragment

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 12 世紀

ネウマの書体や音高表示文字のある赤色譜線つき楽譜であることから、12 世紀後半に北イタリア（ミラノないしはボローニャ周辺）で書かれた聖歌本の一葉と考えられる。テキストは四旬節第 2 週の月曜日のミサ固有文コンムニオに始まり、火曜日、水曜日のミサ固有文（裏面）へと続いている。表面右側には 18 世紀および 19 世紀の筆による 5 種類の書き込みがある。この写本を 10 世紀のものとするその内容には多くの疑問が残るが、18 世紀から関心をよんだ興味深い一葉である。羊皮紙の大きさは縦 27 センチ横 19 センチである。

Bernier, Nicolas, 1665-1734
Cantates franaises, troisieme livre
ベルニエ、ニコラ、1665–1734
フランス・カンタータ集 第3集
Paris, Foucault, 1703 初版

カンタータ集の第4曲《コーヒー》は、この飲物の魅力的な味と香りを酒と対比させて賛美した作品である。コーヒーはフランスへ1643年に入り、1702年にはパリのカフェ「ル・プロコップ」が開店した。バッハの有名な《コーヒー・カンタータ》（1734年頃）に先駆けて作られた、流行の先端をいった曲である。表紙の作曲者表示は単に“Mr.”（ムッシュ）とだけ記されている。印刷は彫版により、声部はハ音記号とト音記号が混じる。

Parchment manuscript, fragment
羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 14世紀

赤色4線四角形ネウマ譜によるアンティフォナ集（アンティフォナは聖歌の一種）の一葉で、テキストは復活祭用のもの。おそらく14世紀後半にパドヴァ周辺で書かれたと推定される。頭文字A（Angelus）にはキリストの復活の場面が描かれており、そこにはジョットのフレスコ画の影響が認められる。羊皮紙の大きさは縦43センチ横19センチ、頭文字Aは縦70ミリ横67ミリである。

● 展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。（バックナンバーも公開しています。）

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2011/9/1 編集●国立音楽大学附属図書館広報委員会 : 二塚恵里・撰正弘